

第 1646 回 (6 月 27 日)

食品産業の海外直接投資と調製食料品輸入

斎 藤 高 宏

本報告の課題は、近年の食品産業の海外直接投資の動向と、それによって大幅に増加しつつある調製食料品輸入の実態及び国内におけるその使用状況などを明らかにすることにある。

食品産業の海外直接投資は、円高経済への移行、農産物の輸入自由化などを背景に、1980 年代半ば以降大幅に増加することになった。とりわけ、1989 年度には、果汁及び牛肉などの輸入自由化を見越してかつてない水準にまで達したのである。しかし、1990 年代に入り、いわゆるバブル経済の崩壊に加えて、投資の一巡、消費の低迷などもあって、数年ぶりに減少に転じてしまった。

こうした食品産業の海外直接投資の低迷も一段と進展しつつある近年の円高のもとで新たな展開をみせつつある。つまり、1992 年度を底に 1993 年度には 4 年ぶりに再び増加することになったのである。そのなかで、もっとも注目すべきことは、直接投資の市場としてアジア諸国が重視されつつあることである。特に、中国への直接投資が最大の関心事となっている。中国では、急激な経済発展を背景に、海外諸国からの直接投資が大幅に増加している。わが国からの直接投資も急増しており、多くの食品企業の熱い視線を浴びている。これまでアジア諸国のなかでは、タイが最大の投資市場であったが、いまやタイを完全に追い抜きわが国の食品産業にとって欠かせない存在となっている。

その最大の目的は、わが国への輸入である。中国は、農産物及び水産物が豊富で、価格も割安であるし、タイなど他のアジア諸国に比べて賃金コスト、輸送コストも低い。そのため、食品企業の多くは直接投資を通じて

わが国への調製食料品輸入に乗り出すことになったのである。その結果、ここ数年中国からの調製食料品の輸入は大幅に増加している。たとえば、冷凍鶏肉、冷凍えだ豆、冷凍えんどう類、たけのこ缶詰、フレンチ・マッシュルーム缶詰、アスパラガス缶詰、うなぎの蒲焼きなどはその端的な例である。

しかも、重要なことは、こうした中国からの輸入が、主要輸入先であった台湾、タイなどにとって代わりつつあることである。たとえば、かつてたけのこ缶詰、アスパラガス缶詰の大半は台湾からの輸入であったが、現在ではそれぞれ数%を占めるに過ぎない。これらはわが国への輸出依存度が高かっただけに、台湾にとってその影響は小さくない。

最後に、国内における輸入調製食料品の使用状況について若干触れよう。食品製造業をはじめ、食品卸売業、大型小売業、外食産業などの輸入調製食料品の使用はかなりの水準になっているが、もっとも積極的に使用しているのが外食産業である。青果物ばかりでなく、畜産物、水産物を積極的に使用している。

では、なぜ輸入調製食料品を使用するのであろうか。それは国産品の不足をカバーできるうえに、供給も安定しているし、しかも、価格面でも有利なものが多いからである。こうした結果、国産品と輸入調製食料品の競合が一段と顕著なものとなっており、国産品にとっては、品質の向上による輸入調製食料品との差別化が最大の課題となっている。